

[様式14]

(対象事業：1 子供を対象とした事業及びその開発にかかる事業)

事業名：特別展覧会に関わる参加体験学習
「金の輝き、ガラスの煌き」

事業者名：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

連携事業館名：なし

住所：奈良県橿原市畝傍町50-2

TEL:0744-24-1185

FAX:0744-24-1355

HPアドレス：<http://www.kashikoken.jp/museum/>



①施設概要

橿原考古学研究所が1938年以来行ってきた発掘調査で出土した実物資料を中心に展示。常設展「大和の考古学」は日本考古学の基準資料をもとに「目で見る日本の歴史」になっている。春秋2回の特別展のほか、毎年の奈良県内の発掘調査の速報展「大和を掘る」や特別陳列を開催している。

②事業の意図目的

就学生を対象として、古代のガラスや金工品の模造製作を実体験して、ものづくりから古代の技術を身近なものとする。あわせて地域の文化財に対する理解を深め、地域独自の文化振興の拠点作りを目指す。

③事業概要

特別展期間中に、展示品と関連するガラス製品ならびに金工品の製作実演とワークショップを開催する。続いて特別展に合わせて制作復元した装身具などに関する講演会を開催し、古代の技術を現代的視点から位置付ける。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作（解説図録、小中学生向けパンフレット、シンポジウムレジュメ）
作成した報告書等

ビデオ	()
冊子	()
その他	()

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 341人

内 訳 ガラス(10月21日)51人、金工(11月17日)60人、シンポジウム(11月18日)230人

(1) 事業の実施状況について

①ワークショップ「ガラス細工」

- ・実施日時 10月21日(日)午前10時～午後4時。開始後も随時受け付け。
- ・実施次第は以下の通り。
- ・参加者は受付後、名札を付けて待機。
- ・主催者挨拶および開催趣旨説明。
- ・講師紹介および講師からガラスについての概略説明。
- ・制作方式は、参加者がビーズと勾玉の二種類から選択して制作する。それぞれ制作場所を分けて、長机に講師と参加者が向かい合って座る。参加者が材料を持って制作に取りかかり、講師は適時アドバイスして補助する。
- ・ビーズの制作手順は、好みの色調のガラスロッドを選び、バーナーで熱して溶解し、離型剤を塗布した鉄棒に巻き付けていく。途中ガラスチップを付着させてそれを熱することによって表面に模様を描く工夫もできる。鉄棒を回転させながら形を整えて完成させる。制作所要時間は約5分。
- ・勾玉の制作手順は、ビーズと同様。まず親玉となる塊を巻き付け、そこから重力を利用して勾玉の尾を伸張させる。鉄棒の半回転を繰り返して形を整え、鋺を利用して完成させる。制作所要時間は約8分。
- ・完成後、パーミキュライトに挿入して徐冷させ、約30分後に取り出す。各自飾り紐を取り付けてペンダント状に仕上げる。
- ・制作所要時間が短時間であるため、参加者の回転がスムーズであった。また講師とマンツーマンで対するため、小学低学年であっても補助することによって制作を行い得た。
- ・ワークショップ用に準備された材料と道具を用いたことにもよるが、ガラス製品が意外に簡単に作れるとの感想が多かった。



ガラス玉制作風景 1



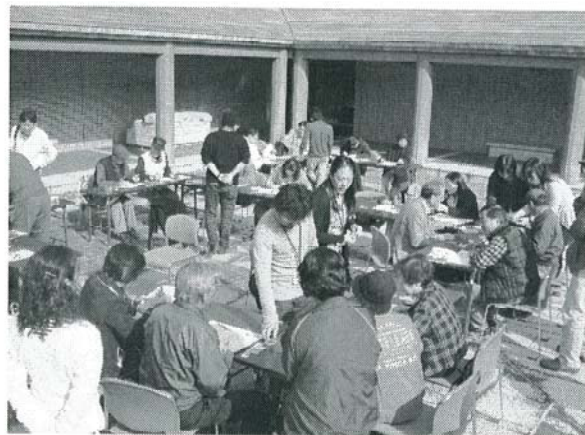
ガラス玉制作風景 2

②ワークショップ「金工細工」

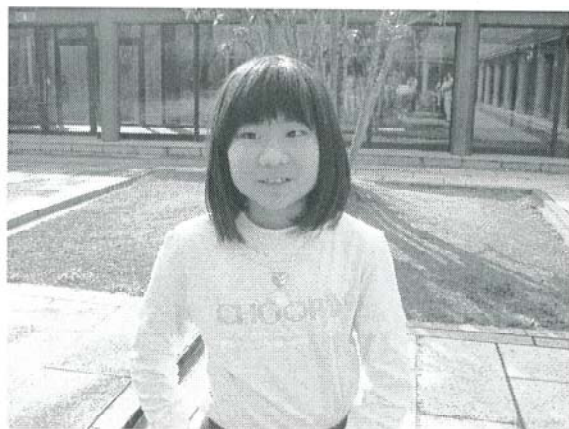
- ・実施日時 11月17日(土)午前10時～、午後2時～の2回。
- ・実施次第は以下の通り。
- ・参加者は受付後、名札を付けて待機。
- ・主催者挨拶及び開催趣旨説明。
- ・講師紹介および講師から作業と工程の解説。
- ・会場は作業台となる長机を5つのブロックに設置。講師を一人ずつ配置し、参加者は随意着席。資料と材料を配布。
- ・制作対象は兵庫鎖を使用した垂飾付装身具で、参加者はペンダント、イヤリング、ピアス、携帯ストラップの4種類から一つを選択する。
- ・制作手順はまず兵庫鎖を5段にくむ。次に垂飾となる銀板に参加者が思い思いにデザインを描き鋏で切断、歪みやバリをサンドペーパーや金槌で整形。
- ・銀板をポンチと鑿で穿孔、兵庫鎖に取り付ける。最後にヘラがけと磨きで仕上げる。
- ・制作所要時間は2時間強。参加者の年齢は小学校低学年から70代まで幅広い。そのため制作時間は個人差が生じたが、おおむね予定時間内に終了した。
- ・垂飾をデザインする際の参考として考古資料を提示したが、それに固執することなく独自のデザインを採る人がいた。ただし、デザインする際には展示資料をあらためて見直した人が多かった。



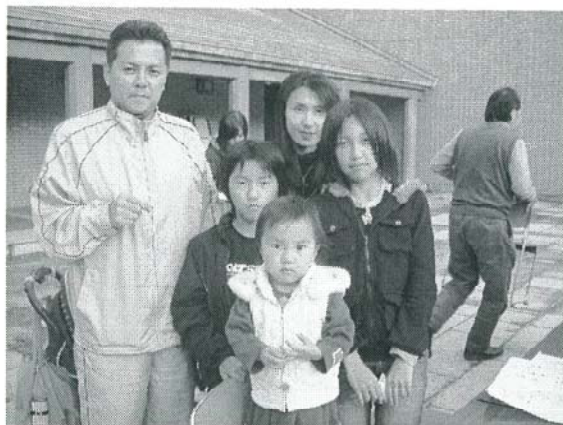
金工品制作風景 1



金工品制作風景 2



制作品 1



制作品 2

③シンポジウム「金輝きとガラスの煌めきの技術」

- ・実施日時 11月18日(土)午前10時から午後5時30分
- ・発表者は以下の通り。

鈴木勉(工芸文化研究所)、大谷千恵(奈良芸術短期大学)、佐竹保彦(佐竹ガラス)、
依田香桃美(Lemi's Metalwork Studio)、山田 琢(鍛鉄・金属造形制作 ottica)、
内堀 豪(東京芸術大学)、比佐陽一郎(福岡市埋蔵文化財センター)、ト部行弘
(橿原考古学研究所附属博物館)

- ・演題とプログラムは以下の通り。

開式	10:00～
個別報告 ①総 論(鈴木)	10:10～10:50
②装身具構成の復元(ト部)	10:50～11:20
③染織製品の復元(大谷)	11:15～11:40
④ガラス製品の製作技術(佐竹)	11:45～12:10
休憩	(12:10～13:00)
⑤銀製垂飾付金具の復元(依田)	13:10～13:40
⑥みずら飾りなどの復元(山田・住・村上)	13:40～14:30
⑦金銅製空勾玉の復元(内堀・石井)	14:30～15:20
⑧耳環の復元(比佐)	15:10～15:50
休憩	(15:50～16:00)
討論会	16:00～17:00
質疑応答	17:00～17:30

- ・個別報告の内容は次の通り。鈴木からは総論として復元研究の意義を述べ、追体験を通して古代人と対話することとした。ト部は装身具の出土状態から着装状態を復元し、展示した復元品の構成についての根拠を述べた。大谷は玉簾状ガラス製品の復元作業を紹介し、製品の使われ方について言及した。佐竹はガラス玉の復元作業から古代のガラス制作技術について述べ、特に発色及び整形の特徴と難易を指摘した。依田は銀製垂飾付金具の復元作業から当時の金工技術について述べ、復元はあくまでも可能性の一つに過ぎないことを指摘した。山田と住、村上はみずら飾りほかを出土状態の詳細な検討から復元根拠について述べた。内堀と石井は日本出土の空勾玉の概観について述べ、藤ノ木古墳出土品は形態の特徴から木型を用いたパイプ状成型の可能性を指摘した。比佐は耳環の制作方法を復元し、金工品制作体制解明へのデータの蓄積の必要性を指摘した。
- ・討論会は個別発表の内容確認し、玉簾状ガラス製品の用途について意見を突き合わせた。また付随する繊維製品の織物技術についても意見を出した。そして当時の金工品を追求する上で復元研究の有効性を再確認した。
- ・質疑応答では会場内からの質問を受け付け、パネラーが回答した。

(2) 地域との連携について

なし

(3) 成果物について

なし

(4) 参加者の反応

開催前の頻繁な問い合わせから、期待の高さを伺わせる予兆があった。実際、金工品については、材料の調達と講師指導体制の関係より各回先着 25 名に限定したが、受付と同時に定員に達してしまい、選外者からは落胆の声が聞こえた。

制作に関して参加者の反応はガラス、金工品ともにおおむね好評であった。時間内に各自がイメージしたものを作り得た上に、ものづくりの楽しさを体験できたことによると思われる。特にアンケートはとっていないため、まとまった反応は提示できないが、参考として web ページ上に公開されている参加体験記をあげる。

《前略》体験学習は2時間を要した。だが、この学習で貴重な体験をさせて貰ったと感謝している。一つの装飾品を完成させるのに、今まで想像もしなかったさまざまな工程を経なければならないことが分かった。それだけではない。古代、皇族や貴族あるいは豪族の首長を葬るのに死出の旅路の衣装に豪華な装飾品で飾った。生前であれば、なおさらのことであろう。したがって、大量の需要があったはずであり、それをまかなうキャパを有した工人集団が存在し、集団内では分業で作業していたものと思われる。

その一人一人は筆者など到底及びもつかないスキルを身につけた技術者だったであろう。悲しいことに、彼等は特定の階級に奉仕するためにだけ物作りを強要された。古墳から出土するこの種の装飾品には、当時の工人たちの悲しい生き様が影を落としている……。そう思うことで、これからは博物館に陳列された出土品の見方が変わってくるようだ。(応請矩明「榎原日記」http://www.bell.jp/pancho/kasihara_diary/content.htm)

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

ものづくりを通して古代の技術を身近なものとし、あわせて地域の文化財に対する理解を深めようとした開催目的は達成できたと判断できる。また広く参加者を募るためにあえて年齢制限は設けなかったが、就学生、就学児も多数参加したことで参加者の年齢層はきわめて幅広くなり、この点についても効果的であった。

それと同時に、展覧会の関連イベントとして開催したことの効果は絶大であった。上記の参加体験記にあるように、実際に制作することによって古代の技術を追体験し、それを元にあらためて展示品を見直した参加者が多数いた。これは展覧会の単なる展示説明だけでは期待できない能動的な見学行為であり、相乗効果として発揮されたといえる。

